BOOK REVIEW

「動物医ものがたり」

森田　正治　著

著者の森田正治さんは、酪農学園大学の獣医学科を昭和四四年に卒業し、以来、根室管内の農業共済組合の獣医師として活躍している。現在、森田氏は根室地区農業共済組合計根別支所次長を勤める。氏は地元で同僚獣医師たちとフォークソング・グループ〝ザ・ジューイズ〟を結成し、「離農の歌」などでもよく知られている。

著者は、本書で共済の獣医として診療の対象としている乳牛を手始めに根室を中心とする道東の自然や野生動物、それに人間の営みを温かい筆致で描く。著者の獣医師としてのバックボーンは、つぎのような言葉によくあらわれている。「動物好きに獣医師はつとまらない」と。なぜなら「酪農は、人間が動物に接するパターンの中でも、過酷なまでの合理性を求められる分野である。ウシはひたすら人間のためだけに、肉やミルクや毛皮をあたえ、……乳牛は泌乳量が落ちたら食肉にされる。動物好きには耐えられないだろう」（本書一六七頁）からである。

だから獣医師の条件は、「生命あるものへの愛情をしっかり持ちながら、その生命を守るための覚めた知識と技術をあわせ持つ」（同上）ところにあるとする。わたしはこれに同感だ。かつてイギリスの経済学者アルフレッド・マーシャルは、「冷やかな頭脳と温かい心情」という言葉を若い経済学徒たちに贈った。わたしは同時にこの経済学者の高邁な理想を想起せずにはおれない。これは根室の専業酪農地帯に根をおろす、森田氏ならではの実感と受けとめたい。

道東は自然が豊かにみえる。しかし、森のなかに足を一歩踏み入れると、様相は一変するようだ。著者によると、「道路沿いにはたしかに木が残っている」が、「裏へまわってみると無残な禿山が広がって」いたりもする。開発途上地域の抱える厳しさは、このようにむき出しとなってあらわれる。

著者は自宅のそばに森田どうぶつ公園を設置しているが、さいきん道東野生動物保護センターを同所に開設した。これには、開発の波のなかでともすれば置き去りにされようとする野生生物の救済が意図されている。

本書は、人間と自然や動物との関わり、しかも現代の経済社会の急激な変化が自然環境へ及ぼす影響などを静かに心にしみるように描いて余すところがない。多くの人びとに薦めたい好著である。

（本書は、みずち書房発行、一九九〇年十一月刊、定価一三三九円。評者、酪農学園大学助教授　中原　准一）